

# 平成 19 年度病害虫発生予報第 6 号

平成 19 年 8 月 2 日  
鳥取県病害虫防除所

## 予報の概要 [ 参考 ]

区 分	農作物名	病 害 虫 名	発 生 時 期	予 想 発 生 量	
普通作物	イ ネ	いもち病(穂いもち)	遅 い	やや多い	
		紋 枯 病	-	やや少ない	
		ニカメイガ	やや遅い	やや少ない	
		セジロウンカ	-	やや多い	
		トビイロウンカ	-	平 年 並	
		斑点米カメムシ類	-	やや多い	
ダイズ	ダイズ	コブノメイガ	平 年 並	多 い	
		紫 斑 病	平 年 並	平 年 並	
		ハスモンヨトウ	平 年 並	やや少ない	
果 樹	ナ シ	カメムシ類	平 年 並	平 年 並	
		黒 斑 病	-	やや多い~多い	
		ハダニ類	-	平 年 並	
		シンクイムシ類	平 年 並	多 い	
	カ キ	カ キ	果実吸蛾類(ヤガ)	やや早い	平 年 並
			うどんこ病	平 年 並	平 年 並
			炭 疽 病	平 年 並	やや多い
	リンゴ	リンゴ	カキノヘタムシガ	平 年 並	やや少ない
			斑点落葉病	平 年 並	平 年 並
	果樹共通	果樹共通	ハダニ類	-	平 年 並
カメムシ類			-	平 年 並	
野 菜	ネ ギ	軟 腐 病	平 年 並	やや多い	
		白 絹 病	平 年 並	平 年 並	
		黒 斑 病	平 年 並	平 年 並	
		ネギハモグリバエ	平 年 並	平 年 並	
		ネギアザミウマ	やや早い	やや多い	
		シロイチモジヨトウ	平 年 並	平 年 並	
	ナガイモ	ナガイモ	炭 疽 病	平 年 並	やや多い
			ヤマノイモコガ	平 年 並	平 年 並
			ハダニ類	平 年 並	平 年 並
	シ バ	シ バ	シロイチモジヨトウ	平 年 並	平 年 並
			スンキリヨトウ	平 年 並	平 年 並
	キャベツ・ブロッコリー	キャベツ・ブロッコリー	シバットガ	平 年 並	平 年 並
			ハスモンヨトウ	平 年 並	やや少ない
ハイマダラノメイガ (ダイコンシンクイムシ)			平 年 並	平 年 並	

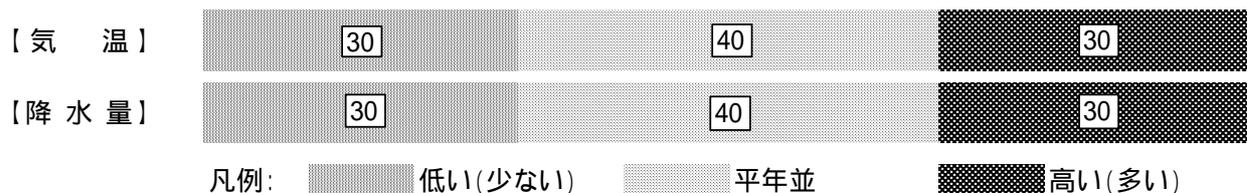
## 気象予報 ( 抜粋 )

1 か月予報 ( 7 月 28 日 ~ 8 月 27 日 : 7 月 27 日、広島地方气象台発表 )  
向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量などの確率は以下のとおりです。

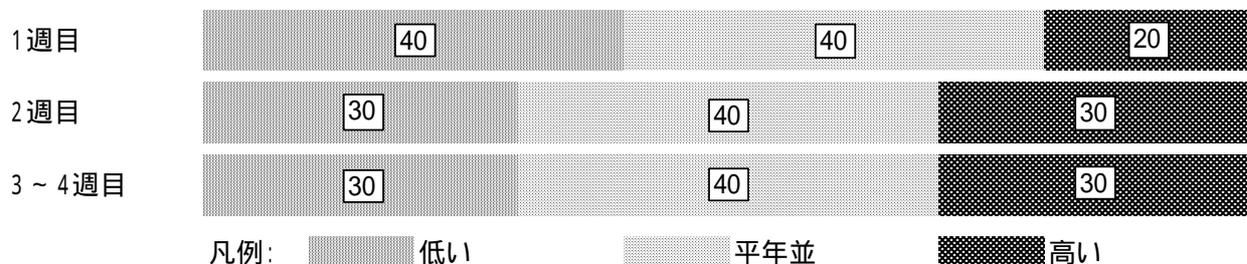
平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

週別の気温は、1 週目は平年並又は低い確率とも 40 % です。

< 向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%) >



< 気温経過の各階級の確率(%) >



## 普通作物

### 【イネ】

#### 1 いもち病(穂いもち)(平成19年7月18日付、病害虫発生予察注意報第2号発表)

##### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域  
発生時期 遅い  
発生量 やや多い

##### (2) 予報の根拠

- ア イネの出穂期は平年より遅いと予想される。  
イ 7月下旬現在、葉いもちの発生ほ場率は32.8%(平年:33.8%)で平年並の発生となっているものの、中発生以上のほ場の割合が平年に比較してやや高い。  
ウ 梅雨明け以降、好天で経過しているものの、7月下旬現在、中間地～山間地を中心に、葉いもちの病勢が終息していないほ場が散見される。  
エ 向こう1か月の気象予報によると、本病の発生を助長しない。

##### (3) 防除上注意すべき事項

病害虫発生予察注意報第2号を参照。

#### 2 紋枯病

##### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域  
発生量 やや少ない

##### (2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、発生ほ場率は23.2%(平年:41.6%)と平年に比較して少ない発生となっている。  
イ 8月1日現在、県予察ほ場における発生は、平年に比較して少ない。  
ウ イネの茎数は平年に比較してやや少ない。  
エ 向こう1か月の気象予報によると、本病の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 出穂期頃までに防除を行う。なお、コシヒカリの防除の目安は、穂ばらみ期の発病株率が18%程度とする。
- イ 残暑などにより病勢進展が衰えず出穂後の防除が必要な時は、粉剤などにより追加防除を行う。

3 ニカメイガ(第2世代)

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	やや遅い
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 予察灯及びフェロモントラップにおける誘殺数は平年より少ない。
- イ 7月下旬現在、現地ほ場における発生は平年よりやや少ない。
- ウ 7月の気温が平年より低かったため、第1世代幼虫の発育がやや遅れている。
- エ 向こう1か月の気象予報によると、本虫の発生を助長する。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 現在、本種を対象とした防除は必要ないが、8月上旬に心枯茎率1.5%以上又は被害株率10%以上の場合、8月中旬(幼虫の発生最盛期)に防除を行う。
- イ 近年、一部の地域では発生が増加傾向にあり、局地的に多発生ほ場が散見されているので、ほ場の発生動向に注意する。

4 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域(特に沿岸部)
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 7月第5半旬現在、予察灯への総誘殺数は平年より少ない。
- イ 7月下旬現在、発生ほ場率は85.2%(平年:67.0%)で平年よりやや高く、1株当たりの平均成幼虫数は2.5頭(平年:1.7頭)で平年よりやや多い。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、本虫の発生を助長する。

(3) 防除上注意すべき事項

- 8月上旬の要防除水準は、成幼虫数10頭/株である。要防除水準を超えているほ場は、防除指針などに従い粉剤などで直ちに防除を行う。

5 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域(特に沿岸部)
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月第5半旬現在、予察灯への総誘殺数は平年並である。
- イ 向こう1か月の気象予報によると、本虫の発生を助長する。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 現在、本虫を対象とした防除は必要ない。しかし、ほ場間差が大きいため、各ほ場における生息密度及び発生予察情報などに注意する。

イ 8月中旬頃の要防除水準は、成幼虫数1頭/株である。要防除水準を超えている場合は、防除指針などに従い防除を行う。

## 6 斑点米カメムシ類

### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域  
発生量 やや多い

### (2) 予報の根拠

ア 水田周辺のイネ科雑草地では、アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソミドリカスミカメ類、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシなどが発生している。

7月中旬現在、捕虫網5往復10回振り平均すくい取り虫数は、132.2頭(平年：平成10～18年、143.9頭)で、平年並の発生となっている。

イ 7月下旬現在、出穂期～穂揃い期を迎えた水田における捕虫網25往復50回振りすくい取り法による平均成幼虫数は12.6頭で平年並の発生となっている。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、カメムシ類の水田への飛来、及びイネへの加害活動に好適な条件となっている。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 穂揃い期～乳熟初期の基本防除を徹底する。その後も発生が多い場合には、7～10日間隔で1～2回の追加防除を行う。とくに、周囲より早く出穂するほ場では、被害が集中する恐れがあるため注意を要する。なお、防除は地域一斉で行うと効果が高い。

イ イネ科雑草地、畦畔などはカメムシ類の増殖源となる。出穂20日前に草刈りを行ったほ場では、再生したイネ科雑草が穂をつける前に再度草刈りを行う。また、出穂20日前頃に水田周辺のイネ科雑草地・畦畔などの草刈りを行っていない場合は、穂揃い期から乳熟初期に草刈りを行い、直ちに防除する。

ウ 水田内で穂をつけたヒエ類は、カメムシ類の発生を助長するので直ちに取り除く。

エ 要防除水準は、出穂後の本田における捕虫網50回振りすくい取り虫数が4頭以上の場合とする。

## 7 コブノメイガ

### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域  
発生時期 平年並  
発生量 多い

### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、発生ほ場率は69.3%(平年：27.7%)で、平年より高い。

イ 向こう1か月の気象予報によると、本虫の発生を助長する。

### (3) 防除上注意すべき事項

発生が多いほ場では、被害発生初期(8月中旬頃)に、防除指針などに従って粉剤などを散布する。なお、粒剤で防除する場合は、次世代の発蛾最盛期(8月上旬頃)に防除指針などに従って散布を行う。

## [ダイズ]

### 1 紫斑病

#### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域  
発生時期 平年並  
発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

- ア 大豆の開花期は平年並となっている。  
イ 向こう1か月の気象予報によると、本病の発生は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

防除指針などに従い、開花期の25～30日後に薬剤散布を行う。

### 2 ハスモンヨトウ

#### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域  
発生時期 平年並  
発生量 やや少ない

#### (2) 予報の根拠

- ア フェロモントラップによる7月第1半旬～第5半旬の総誘殺数は、県予察ほ場(鳥取市橋本)、鳥取市河原町では平年に比べて少なく、湯梨浜町の総誘殺数は、平年よりやや少ない。  
イ 7月下旬現在、現地ほ場の発生は認められていないが、8月上旬以降、幼虫による被害が発生し始めると予想される。  
ウ 向こう1か月の気象予報によると、本虫の発生を助長する。

#### (3) 防除上注意すべき事項

- ア 若齢幼虫は集団で葉裏の葉肉を食害するために表皮が残り白変葉となる。発生初期の防除は、白変葉の発生か所を中心に、捕殺(葉ごとの切除)あるいは粉剤などのスポット散布が有効である。  
イ 幼虫が老齢になると薬剤の効果が悪いため、早期発見と早期防除に努める。

### 3 カメムシ類

#### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域  
発生時期 平年並  
発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、イチモンジカメムシ、アオクサカメムシ、ホソヘリカメムシの、予察灯への総誘殺数は平年並である。  
イ 大豆の開花期は平年並となっている。  
ウ 向こう1か月の気象予報によると、本虫の発生を助長する。

#### (3) 防除上注意すべき事項

防除指針などに従い、開花期の25～30日後と、その10日後に防除を行う。

## 果 樹

### 【ナ シ】

#### 1 黒斑病（平成19年7月24日付、病害虫発生予察注意報第3号発表）

##### （1）予報の内容

発生量 やや多い～多い

##### （2）予報の根拠

ア 7月19日に行った県内15園の巡回調査では、徒長枝葉の平均発病率は8.3%（平年：4.3%）と、6月13日に行った同調査での平均発病率1.0%（平年：1.1%）から急増し、多発園も混在している。

イ 今後1か月の気象予報によると、本病の発生はやや多い～多いと予想される。

##### （3）防除上注意すべき事項

ア 病害虫発生予察注意報第3号を参照。

イ 収穫前の8月中～下旬にストロビードライフフロアブル3,000倍液などを散布する。

#### 2 ハダニ類（カンザワハダニ、クワオオハダニ、ナミハダニ）

##### （1）予報の内容

発生量 平年並

##### （2）予報の根拠

ア 7月中旬に行った巡回調査の結果、カンザワハダニの平均寄生葉率は0.8%（平年：6.7%）、1葉当たりの寄生虫数は0.0頭（平年：0.3頭）、クワオオハダニは12.7%（平年：14.1%）、1葉当たりの寄生虫数は0.3頭（平年：1.2頭）で平年並～やや少ない発生となっている。

イ 7月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）におけるカンザワハダニの1葉当たりの寄生虫数は0頭（平年：0.2頭）で平年並である。

ウ 現地のナシ園で、ハダニ類の密度が高いほ場が一部で認められている。

エ 向こう1か月の気象予報によると、ハダニ類の増殖にやや好適である。

##### （3）防除上注意すべき事項

ア 発生が多い園では、散布量を増やし、枝を洗うように丁寧に薬剤散布する。

イ ハダニ類は、種類によって薬剤効果が異なるので、種類を十分に見極める。また、薬剤の散布にあたっては、連用を避けて輪番散布する。

ウ カンザワハダニ、ナミハダニにはコロマイト乳剤1,500倍液、カネマイトフロアブル1,500倍液、マイトコーネフロアブル1,500倍液などを、クワオオハダニには上記3剤に加えて、ダニトロンフロアブル1,500倍液などを使用する。なお、収穫期が近づいているため、薬剤の散布にあたっては農薬の使用基準を遵守する。

#### 3 シンクイムシ類（平成19年7月13日付、病害虫発生予察注意報第1号発表）

##### （1）予報の内容

発生時期 平年並

発生量 多 い

##### （2）予報の根拠

ア 7月中旬現在、フェロモントラップにおけるシンクイムシ類の誘殺数は平年並であるが、越冬世代成虫、第1世代成虫の発生量は平年より多く、次世代成虫の発生量も多くなることが予想される。

イ 向こう1か月の気象予報によると、ナシヒメシンクイの第3世代成虫（第4回成虫）の発生時期は、平年並の8月中～下旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

病害虫発生予察注意報第1号を参照。

4 果実吸蛾類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い  
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、防蛾灯無設置園での果実被害はほとんど認められていない。

イ ナシ（二十世紀）の生育は平年よりやや早い。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、成虫の加害活動にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 豊水の無袋栽培では黄色蛍光灯の点灯を8月から始める。点灯する時間は、日の入り30分後から日の出30分前とし、2週間おきに点灯及び消灯時刻を変更する。

イ 網掛けを行っている果樹園では、風などによる網の破れに注意する。

[カキ]

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 昨年の本病の発生量は平年並であったため、越冬菌密度は平年並と見込まれる。

イ 向こう1か月の気象予報によると、本病の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 8月上旬にストロビードライフフロアブル3,000倍液、8月下旬にスコア顆粒水和剤3,000倍液などを散布する。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地のカキ園（富有）で新梢の発病がやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報によると、本病の発生はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 樹冠内部の新梢に発病しやすいので、不用な枝は直ちに除去する。

イ 発病した新梢及び果実は、見つけ次第取り除く。

ウ 8月上旬にストロビードライフフロアブル3,000倍液、8月下旬にスコア顆粒水和剤3,000倍液などを散布する。

3 カキノヘタムシガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（鳥取市河原町）の予察灯におけるカキノヘタムシガ第1回成虫の総誘殺数は、少なかった。

イ 第2回成虫の発生最盛期は、平年並の8月上旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

8月初旬にスミチオン水和剤40の1，200倍液などを散布する。多発園では8月15日頃にアグロスリン水和剤2，000倍液などを追加散布する。

[リンゴ]

1 斑点落葉病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地のリンゴ園での発病は平年並となっている。

イ 向こう1か月の気象予報によると、本病の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

8月上旬（早生種収穫前）にアリエッティC水和剤800倍液を、8月下旬（早生種収穫後）にオキシラン水和剤800倍液などを散布する。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）では平年並の発生となっている。

イ 向こう1か月の気象予報によると、ハダニ類の増殖にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

発生が認められた場合は、コロマイト乳剤1，500倍液、カネマイトフロアブル1，500倍液などを散布する。

[共通（ナシ、カキ、リンゴ）]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月31日、8月1日に行ったナシ園における巡回調査の結果、平均被害果率は0.8%（平年：0.7%）であり、平年並の被害であった。

イ 7月中旬現在、予察灯などにおけるチャバネアオカメムシ、クサギカメムシの誘殺数は平年並～少ない。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、カメムシ類の加害活動にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 被害や飛来状況は、ほ場間差が大きいため、園内外をこまめに見回り早期発見に努め、被害果実やカメムシ類の発生が多い場合は早急に防除を行う。

イ 防除は、カメムシ類が飛来する夕方か早朝が効果的である。また、移動性が高いため、広域的な防除に努める。

ウ 薬剤は樹種ごとの防除暦を参考とする。

エ 樹種によっては収穫間近となっているので、農薬の使用基準を遵守する。

## 野 菜

### [ネギ]

#### 1 軟腐病

##### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在の定点調査ほ場における発生量は平年に比べてやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報によると、今後もやや多い発生量が見込まれる。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア ネギが傷つくような無理な土寄せ及び追肥などの作業で発病が助長されるので注意する。

イ 最終土寄せ前にナレート水和剤1,000倍液を散布する。土寄せ後にコサイドDF1,000倍液又はZボルドー500倍液を7~10日間隔で2~3回散布する。

#### 2 白絹病

##### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、定点調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報によると、今後も平年並の発生量が見込まれる。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 8月下旬までに最終土寄せをする作型では、最終土寄せ前にリゾレックス粉剤20~30kg/10aを畦の両側から株元に散布する。

イ 最終土寄せが9月以降の作型では、8月上旬にモンカット粒剤4kg/10aを畝の上側から株元散布する。または、モンカットファイン粉剤20DLの10~15kg/10a、フロンサイド粉剤15kg/10aなどを畝の両側から株元に散布する。

ウ 8月中旬以降に発病がみられる場合は、モンカットフロアブル40の2,000倍液を株元に散布する。

#### 3 黒斑病

##### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在の定点調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 本病は気温が25前後で、降雨が多い場合に多発する。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後も平年並の発生量が見込まれる。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 根傷み、肥料不足となると発病しやすいので、肥培管理に注意する。

イ ダコニール1000の1,000倍液、ポリベリン水和剤1,500倍液などを予防散布する。発病後は、ロブラール水和剤1,000~1,500倍液などを散布する。

#### 4 ネギハモグリバエ

##### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在の定点調査ほ場における発生量は、平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報によると、今後も平年並の発生量が見込まれる。

##### (3) 防除上注意すべき事項

粒剤ではダントツ粒剤3~6kg/10aの株元散布、散布剤ではアグロスリン乳剤2,000倍液、アクタラ顆粒水溶剤1,000~2,000倍液などを散布する。

#### 5 ネギアザミウマ

##### (1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 やや多い

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在の定点調査ほ場における発生量は、境港地区を中心にやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報によると、今後もやや多い発生量が見込まれる。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 粒剤ではダントツ粒剤3~6kg/10a株元散布、散布剤ではアグロスリン乳剤2,000倍液、モスピラン水溶剤2,000倍液、アドマイヤーフロアブル2,000~4,000倍液、アクタラ顆粒水溶剤1,000~2,000倍液、ランネート45DF1,000~2,000倍液、マラバッサ乳剤800~1,000倍液などを7~10日間隔で薬剤の系統を替えて散布する。

イ 同一、同系統の薬剤を連用すると効果が低下する恐れがあるので、ローテーション散布に努める。

#### 6 シロイチモジヨトウ

##### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬における、県予察ほ場(北栄町)でのフェロモントラップの誘殺数は平年並である。

イ 定点調査ほ場における発生は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後も平年並の発生量が見込まれる。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 8月上旬現在、幼虫の発生がみられるほ場では、早急に防除を行う。

イ 防除適期は若齢幼虫時で、この時期を逃すと防除困難となる。防除薬剤は、スピノエース顆粒水和剤5,000倍液、アタプロン乳剤2,000倍液、コテツフロアブル2,000倍液などを用い、5~7日間隔で2回程度防除を行

う。

## [ ナガイモ ]

### 1 炭疽病

#### ( 1 ) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

#### ( 2 ) 予報の根拠

ア 7月下旬現在の定点調査ほ場における発生量は、平年に比べてやや多い。

イ 局地的に発病による落葉が多いほ場が見受けられる。

ウ 本病は降雨によって発病が増加する。

エ 向こう1か月の気象予報によると、今後もやや多い発生量が見込まれる。

#### ( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。

イ 8月上旬現在、茎葉が繁茂して薬液がかかりにくい状態なので、丁寧に薬剤を散布する。

ウ 8月の薬剤防除には、ダコニール1000の1,000倍液又はジマンダイセン水和剤400~600倍液などを予防散布する。

### 2 ヤマノイモコガ

#### ( 1 ) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### ( 2 ) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場(北栄町)におけるフェロモントラップにおける成虫の誘殺数は平年並である。

イ 7月下旬現在の定点調査ほ場における幼虫の発生量は、平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後も平年並の発生量が見込まれる。

#### ( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア 本害虫は、高温乾燥条件及び風通しの悪いほ場で被害が増加するため、早期発見に努める。

イ アタブロン乳剤2,000倍液、トレボン乳剤1,000倍液などを7~10日間隔で2回程度散布する。薬液が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧に行う。

### 3 ハダニ類

#### ( 1 ) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### ( 2 ) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、定点調査ほ場における発生量は、局地的に発生量のやや多いほ場が見受けられるが、全体的には平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報によると、今後も平年並の発生量が見込まれる。

#### ( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア 高温乾燥条件で発生が増加する。薬剤防除は、茎葉が繁茂して薬液がかかりにくいので、散布量を多めにして丁寧に散布する。

イ コテツフロアブル2,000倍液、ニッソランV乳剤1,000~

1,500倍液、コロマイト乳剤1,000倍液などを使用する。

#### 4 シロイチモジヨトウ

##### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）における、フェロモントラップの誘殺数はやや少なく、定点調査ほ場における発生は認められなかった。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後も平年並の発生量が見込まれる。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 次世代の加害幼虫の発生時期は9月上中旬と予想され、この時期を重点に防除を行う。

イ 防除適期は若齢幼虫時で、この時期を逃すと防除困難となる。トレボン粉剤DL4kg/10a、デルフィン顆粒水和剤1,000倍液などを用いて、5~7日間隔で2回程度防除を行う。

### [シバ]

#### 1 スジキリヨトウ

##### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、フェロモントラップの成虫誘殺数は平年並である。

イ 定点調査ほ場において、若齢幼虫による白化葉はみられておらず、卵塊数はやや少ない。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後も平年並の発生量が見込まれる。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 卵のふ化直後の8月上~中旬に、ダイアジノン粒剤5の6~9kg/10a又はオルトラン粒剤10kg/10aを散布する。

イ その後も幼虫の発生がみられる場合は、ダイアジノン乳剤40又はカルホス乳剤の1,000倍液などを散布する。

#### 2 シバツトガ

##### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、定点調査ほ場において、若齢幼虫による被害は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報によると、今後も平年並の発生量が見込まれる。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 成虫の発生ピークは、平年並の7月下旬~8月上旬であると考えられる。

イ 8月上~中旬に、ダイアジノン粒剤5の6~9kg/10a又はオルトラン粒剤10kg/10aを散布する。

ウ その後も幼虫による被害がみられる場合は、ダイアジノン乳剤40又はカルホス乳剤の1,000倍液などを散布する。

## [ キャベツ、ブロッコリー ]

### 1 ハスモンヨトウ

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 やや少ない

#### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場におけるフェロモントラップの成虫誘殺数は、やや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、今後もやや少ない発生量が見込まれる。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 夏期の高温乾燥条件で多発しやすい。また、中齢幼虫以降は薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫期の防除を徹底する。

イ キャベツには、ラービン水和剤75の1,000~1,500倍液、アタブロン乳剤2,000倍液、アフーム乳剤1,000~2,000倍液、トルネードフロアブル2,000倍液などを散布する。

ウ ブロッコリーには、プレオフロアブル1,000倍液、エルサン乳剤の1,000倍液などを散布する。

### 2 ハイマダラノメイガ(ダイコンシンクイムシ)

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、定点調査ほ場における、幼虫の被害はほとんどみられていない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、今後も平年並の発生量が見込まれる。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 本虫は高温少雨、残暑の厳しい年に多発生し、内部の未展開葉や成長点部が食害されるので注意する。

イ 育苗施設では、防虫寒冷紗被覆(網目1.5mm以下が好ましい)を実施し、害虫の侵入を防ぐ。

ウ キャベツには、チューンアップ顆粒水和剤2,000~3,000倍液、スピノエース顆粒水和剤5,000倍液、アフーム乳剤1,000~2,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液などを散布する。

エ ブロッコリーには、チューンアップ顆粒水和剤2,000~3,000倍液、エルサン乳剤1,000~2,000倍液などを散布する。

## [おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。( <http://www.famic.go.jp/> )

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、  
周辺への飛散には充分注意しましょう。**

### < 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報やフェロモントラップの調査結果（野菜の各種害虫、果樹のシンクイムシ類）、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所  
〒680-1142 鳥取市橋本 260  
TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647  
E-mail : boujyot@titan.ocn.ne.jp

次回の予報発表は、8月23日（木）の予定です。